

II 病害虫発生予察事業

1. 病害虫の発生経過概要及び発生原因分析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	早：並 普：並	早：並 普：並	早期、普通期栽培とも発生程度は並であった。病原菌は、リゾプス菌、トリコデルマ菌の発生が目立ち、一部でごま葉枯病菌、もみ枯細菌病菌による苗立枯の発生もみられた。		種籾消毒及び播種時、 発芽後の薬剤処理
	いもち病 苗いもち	並	少	一部で発生がみられたが少発生であった。		
	いもち病 葉いもち	早：並 普：やや遅	早：並 普：並	早期では、6月3半旬より発生が見られ、6月下旬の発生は場率は24%で発生程度は並であった。 普通期では、6月6半旬より発生がみられ、8月上旬の発生は場率は44%であった。その後山間部を中心に一部で上位葉への進展がみられたが、発生程度は平年並であった。		育苗箱施薬及び常発地帯では本田期における 薬剤散布
	いもち病 穂いもち	早：並 普：並	早：並 普：やや多	早期では、8月上旬より発生がみられ、発生程度は並であった。 普通期では、8月下旬より発生がみられ、9月下旬の発生は場率46%、平均発病株率は14%であった。早植地帯の早生種や山間部の一部で多発は場がみられ、枝梗いもちの発生が主体であった。全般的にはやや多の発生であった。	・9月上旬の曇 雨天	・出穂前の粒剤施薬 ・出穂前後に殺虫殺菌 混合剤によりカメム シ類等の害虫との同 時防除
	紋枯病	早：並 普：やや早	早：並 普：やや多	早期では、6月26日に県予察ほ場で初発を確認、7月下旬の発生は場率は68%、平均発病株率は13%であった。出穂後の上位葉鞘への進展は概して少なく平年並の発生であった。 普通期では、6月下旬に初発を確認。その後早生種では、8月5半旬より上位葉進展がみられ、各地で葉腐れ症状のは場がみられた。また中晩生品種では9月の高温と降雨により9月2半旬より上位進展がみられた。9月下旬の発生は場率は82%、平均発病株率は15%とやや多の発生であった。	・9月の高温と 断続的降雨	・穂ばらみ期から出穂 期にコブノメイガ、 ウンカ類等との同時 防除 ・9月上旬以降の上位 進展時における防除 不徹底により被害発 生

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	白葉枯病	やや遅	少	8月7日長与町で初発を確認、その後一部で発生がみられたが全般的には局所的で少発生であった。		常発地帯の一部で防除が実施された程度
	ばか苗病	早：並 普：並	早：並 普：並	早期では並の発生であった。 普通期では育苗期に一部で多発が認められ、本田でも各地で発生が認められたが、全般的には平年並の発生であった。	・一部の種子消毒薬剤に対する耐性菌の発生	・種子消毒
	もみ枯細菌病	早：並 普：並	早：やや多 普：やや多	早期では局所的に少発生がみられた。 普通期では早生種で8月6半旬より発生がみられ、一部で多発は場もみられた。その後9月上旬の降雨により中晩生種にも発生がみられた。発生は場率は8月下旬1.7%、9月下旬6.5%、平均発病株率は9月下旬2.4%で、全般的にはやや多の発生であった。	・出穂期の高温多雨 ・発生程度の子測困難により防除不徹底 ・現行薬剤の防除効力不足	・穂いもちとの同時防除
	ツマグロヨコバイ	並	並	越冬密度は平年並であった。越冬世代成虫最盛期は4月2半旬、第1世代成虫最盛期は6月3半旬、第2世代成虫最盛期は7月5半旬であった。発生時期、発生量とも平年並であった。		箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除
	萎縮病	並	少	萎縮病の発生は少なかった。		
ヒメトビウンカ	やや早	並	ヒメトビウンカの越冬密度は平年並であったが、第1世代幼虫の小麦は場における生息量は前年よりやや多かった。第2世代以降の発生量は平年並であった。越冬世代成虫最盛期は、3月6半旬～4月1半旬、第1世代成虫最盛期は6月1半旬、第2世代成虫最盛期は7月1～2半旬で発生時期はやや早く、第1世代の保毒虫率は1.5%であった。	・第1世代虫の保毒虫率は前年に比べ低下した。	・箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・ウンカ類飛来時における同時防除が主体で単独防除は少ない	
縞葉枯病	早：並 普：並	早：少 普：並	縞葉枯病は、早期では6月29日に森山町で初発を確認、その後各地で発生を認めたが発生株率は低く、少発生であった。 普通期では、7月中旬より発生し、局所的に坪状発生もみられたが7月下旬の発生は場率は1.1%、発病株率は0.1%で平年並の発生であった。			

セジロウンカ	並	並	6月5日初飛来、6月9、15、27日と7月1～3日に少飛来、7月8～13日に中飛来、8月30日～9月3日に多飛来がみられた。飛来時期はやや早かったが、8月までの飛来量はやや少なかった。飛来量は地域差がみられ、西彼杵半島及び県央でやや多かった。		<ul style="list-style-type: none"> ・多飛来時の集結産卵期及び幼虫ふ化揃い期の防除 ・生育期毎の要防除密度の設定が必要
トビイロウンカ	並	並	セジロウンカとほぼ同時期の飛来であったが、本虫の混入率は低く、飛来量は少なかった。県平均株当たり寄生頭数は8月下旬1.3頭、9月中旬1.9頭で平年並の発生であった。9月上旬に坪枯が初確認された。なお8月の短翅雌率は98%と高かった。	<ul style="list-style-type: none"> ・8月中の生息密度には場間差が大きく防除の実施時期、回数が不揃い 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼虫ふ化揃い期の単独防除及びコブノメイガ等の病害虫との同時防除
コブノメイガ	並	並	6月6日に成虫、9日に2齢幼虫を確認した。主な飛来は7月12～13日、9月1～3日に中飛来がみられた。飛来量はやや少なかった。第1世代成虫最盛期は8月3半旬、第2世代成虫最盛期は9月2半旬であった。		<ul style="list-style-type: none"> ・第1世代の防除はウンカ類との同時防除、第2世代以降は紋枯病等との同時防除 ・出穂期以降の防除不徹底
イネミズクムシ	早：並 普：やや早	早：やや多 普：やや多	越冬密度は一部に多発地域がみられたが全般的に平年並であった。早期水稲では田植直後からは場侵入があり、飛び込み最盛期は5月2～3半旬にみられた。5月中旬の県平均発生は場率は61%、株当たり寄生虫数は0.16頭で平年に比べやや多かった。普通期早植地帯での発生量もやや多く、一部で被害が目だった。新成虫の発生は6月5半旬からみられた。本年新たに、国見町、上五島町、新魚目町、有川町、巖原町の5町に発生分布が拡大した。		<ul style="list-style-type: none"> ・常発地帯では育苗箱施薬による防除が主体 ・発生拡大地域等では本田期における薬剤散布 ・発生拡大地域における初期防除の不徹底
スクミリンゴガイ	やや早	やや多	昨年秋期の発生が多く、また暖冬により越冬生貝率は高かった。既発生地域において面積の増加がみられ、やや多の発生であった。3月下旬以降水路での摂食活動が認められ、一部地域で田植後に加害し被害が出た。本年の発生市町村数は6市14町で、前年より1町増加した。		<ul style="list-style-type: none"> ・水田での薬剤防除法は一応確立されているが、実施は少ない。 ・用水路での防除技術の確立が必要である。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ムギ類	さび病類	小麦： やや遅 二条： やや遅 裸： やや遅	小麦： やや多 二条：少 裸：少	小麦の赤さび病が5月中旬以降急激に増加し、局部的に多発は場も見られ、全般的にやや多の発生となった。二条大麦、裸麦では少発生であった。その他のさび病類は極めて少ないか発生を認めなかった。		・採種圃等一部を除いて防除は実施されていない。
	うどんこ病	早	やや多	1月下旬二条大麦に発生、4月以降二条大麦と小麦で局部的に多発した。	・4月の高温乾燥	
	赤かび病	並	やや多	5月上旬以降、二条大麦と小麦で局部的に多発した。全般的には大麦で多、裸麦、小麦ではやや多の発生であった。	・5月上・中旬の降雨	
ジャガイモ	疫 病	春作：早	春作：並	春作：平年より早く3月に初発生を認めた。その後の病勢の進展は緩慢であった。生育後期の5月中旬以降多発は場も認められたが、5月下旬の県下の発生は場率は64%、発病株率は38%で、全般に平年並の発生であった。 秋作：10月下旬以降発生がみられ、11月上旬には県平均の発病株率1.8%に達した。一部に多発は場も見られたが、全般には平年並の発生であった。	・4～5月の乾燥	4月下旬以降2～3回の薬剤散布
		秋作：並	秋作：並			10月中旬以降1～2回の薬剤散布
	アブラムシ類	春作：早 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：2月下旬から発生がみられた。5月上旬には一部に多発は場も見られ、県平均の寄生頭数は1株当たり20頭に達したが、全般に平年並の発生であった。種類別では、チューリップヒゲナガアブラムシの発生が目立った。 秋作：萌芽以降発生がみられ、株当たりの寄生虫数は9月下旬0.01頭、10月下旬1.1頭、11月下旬3.5頭で推移し、平年並の発生であった。	・冬季の温暖	・アブラムシの種類別に防除効果が異なる薬剤があり、使用薬剤の選択に苦慮

	ニジュウヤホソ テントウ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：生育末期の5月下旬、発生はやや増加し一部多発は場も見られた。県平均の被害株率は8%で、全般に平年並の発生であった。 秋作：全般に平年並の発生であった。県平均の被害株率は10月下旬2%であった。		アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤカ類	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：ハスモンヨトウ、ヨトウガによる食害が見られたが全般的に平年並の発生であった。 秋作：全般には平年並の発生であった。		アブラムシ類との同時防除
	ジャガイモガ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：一部で発生がやや多かったが、全般に並の発生であった。 秋作：一部に多いは場も見られたが、全般には平年並の発生であった。県平均の被害株率は10月下旬2%に達した。		アブラムシ類との同時防除
大豆	紫斑病	並	並	一部で多発は場がみられたが、全般的には平年並の発生であった。	・種子消毒の不徹底	
	べと病	並	並	8月下旬、波佐見町で発生を確認、その後各地で発生し、9月下旬の発生は場率は56%、平均発病株率は37%で、平年並の発生である。		一部で僅かに防除が実施された程度
	葉焼病	並	やや多	8月上旬三井楽町で発生を確認、その後各地で発生した。9月下旬の発生は場率は73%、平均発病株率は62%で、平年に比べやや多の発生である。	・9月上旬の降雨	
	ハスモンヨトウ	並	並	8月上旬、諫早市で白変葉を初確認、8月下旬より各地で白変葉がみられたが、平年並の発生である。	・ふ化幼虫の分散前、若齢期防除の不徹底 ・養蚕地帯での効果的な防除薬剤がない	・8月下旬、9月下旬の若齢期を主体に防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
大豆	カメムシ類	並	並	イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ等が主体で、9月下旬の発生は場率は17%、1株当りの寄生頭数0.03頭で、10月に入り発生は場率がやや増加したが、全般的には平年並の発生であった。		・稚莢期～子実肥大期にかけてハスモンモトウとの同時防除
	ダイズサヤマハエ	並	並	地域によって発生に差がみられたが平年並の発生で、10月中旬の被害率は、県予察は場で4%、県下の平均が2%であった。		・カメムシ類と同時防除
柑 橘	そうか病	葉：やや早 果実：並	並	春葉での初発生は、4月12日に長与町で認め、平年に比べやや早かった。4月下旬から5月の降雨により発生は増加したが、その後県平均の発病率は0.5%程度で推移し、増加は認められなかった。果実では6月下旬より発生し、発病率は0.5%程度で推移した。 葉、果実ともに一部で多発園が見られたが、全般的には平年並の発生であった。	・4月下旬から5月の降雨	発芽直後、落果期、幼果期に重点防除
	かいよう病	葉：早 果実：並	並	越冬病斑量は平年並であった。春葉での初発は平年に比べ早く、4月17日に大村市で認めた。発生は5月の降雨により増加したが、県平均の発病率は0.5%程度で推移した。果実では7月上旬より発生し、その後の発病率は0.5%程度で推移した。葉、果実ともに平年並の発生であった。	・り病枝葉の摘除不徹底 ・発芽時期が早く、発芽前の防除が不徹底であった ・4月下旬～5月の降雨	銅剤、ストレプトマイシン剤による防除
	黒点病	並	並	春期の枯枝の発生量は平年並であった。その後の発生は7月中旬以降増加したが、平年並の発生であった。これにともない、発病果実は7月中旬～8月上旬及び9月に増加し、10月の発病率は47%で平年並であった。	・9月上旬の断続的降雨による適期防除の不徹底 ・枯枝除去の不徹底	・枯枝除去 ・5～8月に3～4回防除 ・9月の長雨時に防除時期を失った園がみられた。

	ミカンハダニ	並	やや多	春先の発生は平年並で、5月下旬以降増加し、7月中旬の県平均寄生葉率は16%となった。その後8月上旬に一旦減少し、8月下旬から再び増加して、10月下旬43%、11月下旬は33%、12月中旬33%であった。一部多発は場もみられ、全般的には平年に比べやや多の発生であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・冬季のマシン油乳剤の散布不徹底 ・秋季の好天 ・秋季の防除不徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬季マシン油乳剤の散布不徹底園では、春先より発生が多く、6～7月に防除実施。 ・ヘキソチアゾクス剤等に対する感受性の低下 	
	ヤノネカイガラムシ	並	並	1令幼虫の初発時期は、第1世代が5月上旬で平年に比べやや早く、第2世代は7月下旬で平年並であった。発生量はともに平年並であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・冬季のマシン油乳剤の散布不徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・天敵（ヤノネツヤコバチ、ヤノネキイロコバチ）の増加によりヤノネカイガラムシの密度低下 	
	カメムシ類	並	多	春先の越冬虫は平年並であったが、ヒノキきゅう果における8月中旬の生息密度は平年より高く、8月下旬以降果樹園への多飛来が認められ、極早生温州を中心に被害がみられた。予察灯への飛来も8月下旬より増加し、9月上旬には多飛来が認められた。	<ul style="list-style-type: none"> ・梅雨期の少雨及び夏季の乾燥 	<ul style="list-style-type: none"> ・着色期以降、飛来時にMEP剤による防除が実施されたが、一部で防除時期を失した 	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	越冬世代～第2世代成虫発生量は平年並に比べやや少なかったが、第3世代以降の成虫発生量は平年に比べやや多かった。被害果は6月下旬より認められ、8月上旬以降増加し、平年に比べやや多の発生であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・梅雨期の少雨及び夏季の乾燥 	<ul style="list-style-type: none"> ・6～9月に黒点病との同時防除 ・多発地帯ではアセフェート剤等による単独防除 	
ビ	ワ	がんしゅ病	やや早	少	春葉における初発は2月下旬で平年に比べやや早く、その後の発生量は平年に比べやや少なかった。夏葉における発生は、梅雨期の降雨が少なかったことと夏季の乾燥のため、平年に比べ少なかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・5月上旬の風雨 ・梅雨期の少雨及び夏季の乾燥 	<ul style="list-style-type: none"> 銅剤とカルタップ剤混用による同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ビワ	ナンメシクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		銅剤とカルタップ剤混用による同時防除
ナシ	黒斑病	並	並	初発は、4月25日で平年並であった。その後の発生は、5月下旬から6月上旬にかけて増加したが全般に発生量は、葉、果実とも平年並であった。		萌芽期から袋掛け期までの防除に重点をおく
	黒星病	遅	少	初発は、6月19日で平年より遅かった。発生量は、葉、果実とも平年に比べ少なかった。		4～5月の初期防除に重点をおく
	赤星病	並	並	初発は、4月15日で平年並であった。感染期間が平年に比べ長くなり、5月下旬から6月上旬にかけて発生が増加した。しかし、全般には発生量は葉、果実とも平年並であった。		萌芽期から新葉展開期までの防除に重点をおく
	うどんこ病	並	やや多	8月上旬より発生がみられ、8月下旬以降多発は場が散見された。その後の発生も全般にやや多かった。		初期防除の徹底
	ナンメシクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		7～8月の第1～2世代の防除に重点をおく
	ハダニ類	並	やや多	梅雨明後、密度上昇がみられ、8月後半より急激に増加し、その後の発生も全般に多かった。		7月の初発時及び8月の多発時の防除に重点をおく
	カメムシ類	並	多	幼果期及び成熟期に一部被害が見られた。越冬成虫量は平年並で、その後の発生量は多かったが、被害量は平年並であった。		無袋栽培では防虫網の設置、袋掛け栽培では成虫飛来期の防除
	アブラムシ類	並	並	ナシノアブラムシ、ワタアブラムシの発生が主であり、発生量は平年並であったが、一部多発は場もみられた。		合成ピレスロイド系剤を主体に防除
チャ	炭そ病	並	並	梅雨期後半から秋季にかけて山間部を中心に発生したが、全般には平年並の発生量であった。		一、二番茶期の開葉期に重点防除

	アブラムシ類	並	並	一部のは場で発生がみられた。		
	ミナミキイロ アザミウマ	並	やや少	11月下旬の県下の発生は揚率は11%、寄生葉率は0.1%、 12月下旬の寄生葉率は4%である。		・育苗期から本田期の 体系防除の徹底
	ホソソコナジラミ	並	並	11月下旬の県下の発生は揚率は22%、寄生葉率は0.7%、 12月は寄生葉率1%である。		・被害許容水準以下での 防除の徹底
メロン	べと病	並	並	5月下旬に県平均発病葉率5%と発生がやや多かったが全般に は平年並みの発生であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	並	5月上旬に県平均発病葉率10%と発生がやや多かったが、全般 に平年並の発生であった。		
	ミナミキイロ アザミウマ	並	やや少	生育後期に発生の多いは場が見られたが、全般にやや少で経過 した。		・育苗期から本田期の 体系防除の徹底
スイカ	つる枯病	並	やや少	6月上旬に県平均発病葉率7%とやや多かったが、全般にはやや 少の発生であった。		・初期防除の徹底
	炭そ病	並	やや少	5月下旬から6月上旬に県平均発病葉率5%に達したが、全般 にはやや少の発生であった。		
	ハダニ類	並	並	ハダニ類、アブラムシ類ともに一部に多発は場も認められたが、 全般に平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並			
春ハクサイ	根こぶ病	並		3月下旬から発生がみられ、前年より発生面積は拡大したが、 被害程度は前年より軽く、極一部のは場で廃棄された。		・定植前の土壌消毒の 徹底 ・土壌改良
	コナガ	並	やや多	4月下旬～5月にやや多の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬ハクサイ (63年播種)	軟腐病	並	並	12月まで、発生は少なかったが、1月は県平均発病株率21%と増加した。全般に平年並みの発生であった。		・軟腐病に対する慣行薬剤の効力不足
	白斑病	並	並	10月より発生がみられたが、やや少で経過した。3月増加したが、平年並の発生であった。		
	コナガ	並	やや多	9月以降発生が増加した。県平均の寄生株率は11月下旬に23%に達し、その後の厳寒期にも幼虫の寄生がみられ、全般にやや多の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪番散布
秋冬ハクサイ (元年播種)	軟腐病	並	並	収穫期に入ったハクサイに一部発生がみられるが、全般に平年並みの発生であった。		・軟腐病に対する慣行薬剤の効力不足
	白斑病	やや早	やや多	10月以降発生がみられ、発病株率11月下旬3%、12月下旬40%である。		
	アブラムシ類	並	並	10月以降発生がみられ、10月下旬にピークに達した。県平均の寄生株率は9月下旬0%、10月下旬28%、11月下旬7%である。		
	コナガ	並	並	9月以降発生がみられ、10~11月前半が発生のピークであった。12月に再び増加した。県平均の寄生株率は11月中旬に19%、11月下旬3%、12月下旬27%である。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	10~11月前半に発生がみられ、10月下旬の県平均の寄生株率は0.3%に達した。		
冬キャベツ (63年植付)	黒腐病	並	並	一部に多発ほ場もみられたが、全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	菌核病	並	並	2月に発生が目立ったが、全般に平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春トマト (元年植付)	アブラムシ類	並	並	県平均の寄生株率は11月下旬0.02%、12月下旬も一部に発生がみられる。		
	オハムソコシラミ	並	並	定植以降、発生がみられ、県平均の寄生株率は11月下旬0.9%、12月下旬0.4%である。		・被害許容水準以下での防除の徹底
冬春キュウリ (63年植付)	べと病	並	並	1月に県平均の発病葉率32%とやや多発したが、その後低下し、3月以降再び増加した。全般には平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	並	11~12月にやや多発(12月の県平均の発病葉率21%)したが、1月に入り低下し、その後は再び増加し、6月上旬には43%に達したが、全般に平年並みの発生であった。		
	灰色かび病	並	並	1月以降増加し、県平均発病果率は1月下旬4%、2月下旬4%とやや多かったが、全般に平年並の発生であった。		・薬剤耐性菌の対策
	菌核病	並	並	1月以降増加し、県平均発病果率は1月下旬2%、2月下旬3%とやや多かったが、全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底 ・被害果の除去
	ミナミキイロ アザミウマ	並	やや少	3~4月に発生が目立ったが、全般にやや少の発生であった。		・育苗期から本田期の 体系防除の徹底
冬春キュウリ (元年植付)	べと病	並	並	11月下旬の県下の発生は場率は68%(前年40%)、発病葉率は9%(前年9%)、12月下旬の発病葉率は12%(前年0.8%)である。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	並	11月下旬の県下の発生は場率は68%(前年40%)、発病葉率は6%(前年8%)であったが、12月は減少した。		
	灰色かび病	並	並	一部のは場で発生がみられた。		・薬剤耐性菌の対策
	菌核病	並	並	12月下旬の発病果率は1%である。		

	チャノコカクモン ハマキ	並	やや少	各世代とも少なかった。		二番茶期開葉期に重点 防除
	チャノホソガ	並	並	三番茶、秋芽での発生が多く、一部被害葉の目立つほ場が認められたが、全般には平年並の発生であった。		各茶期の開葉期の防除
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	やや多	梅雨期後半より発生がみられ、一部多発ほ場が認められた。		
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	被害葉の目立つほ場が見られたが、全般に発生量、被害量ともに平年並であった。		
	カンザワハダニ	並	やや少	一番茶期にやや多発したが、全般にやや少で経過した。		
	クワシロ カイガラムシ	並	やや多	各世代とも平年に比べやや多かった。		越冬期及び幼虫発生初 期防除
冬春トマト (63年植付)	疫 病	並	やや少	疫病は2月下旬に一部のほ場で発生がみられたが、全般に発生は少なかった。		・初期防除の徹底
	灰色かび病	並	やや多	1月下旬以降発生がみられ、その後漸増した。4月に低下したが、5月に再び増加5月上旬の県平均発病果率は10%に達し、やや多となった。		・薬剤耐性菌対策のため 薬剤の輪番散布 ・被害果等の除去
	オオシロコナジラミ	並	並	定植以降、やや少発生で経過したが、3月下旬以降増加し、5～6月にやや目立った。		・被害許容水準以下の 防除の徹底
冬春トマト (元年植付)	疫 病		未確認	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった。		
	灰色かび病		未確認	”		
	葉かび病	並	やや多	県平均の発病株率は11月下旬20%、12月下旬13%、各地に発生が認められる。		・初期防除の徹底

	コナガ	やや早	やや多	8月以降発生はやや多く、寄生株率は9月～11月が30～40%、12月～3月が20～30%と高率で推移した。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪播散布 ・コナガとの同時防除
	モンシロチョウ	やや早	やや多	8月以降発生がやや多く、一部のは場では1月下旬まで幼虫の寄生を認めた。		
冬キャベツ (元年植付)	黒腐病	並	並	一部に発生がみられるが、平年並の発生である。		
	菌核病		未確認	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった。		
	黒斑病	並	並	一部に発生がみられるが、平年並の発生である。		
	アブラムシ類	並	並	各地に発生がみられ、11月下旬の県平均の寄生株率は12%、株当りの寄生虫数は0.9頭、12月下旬の寄生株率は11%、株当りの寄生虫数は0.6頭である。		
	コナガ	並	並	発生は10月下旬～11月中旬にピークに達し、その後気温の低下とともに減少したが、12月に再び増加した。県平均の寄生株率は9月下旬3%、10月下旬25%、11月下旬10%、12月下旬26%である。11月中旬の株当り寄生虫数は6頭であった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪播散布
	モンシロチョウ	並	並	発生は10月下旬～11月中旬がピークであった。県平均の寄生株率は9月下旬0.3%、10月下旬1%、11月中旬2%、11月下旬1%、12月下旬0.8%である。		・コナガとの同時防除
タマネギ (63年植付)	白色疫病	並	やや多	1月下旬に初発生、その後が増加し、3月下旬には県平均発病株率は16%に達し、やや多の発生となった。特に県南部での発生が目だった。		・初期防除の徹底
	べと病	並	やや多	2月下旬に初発生。その後発生は増加し、県平均発病株率は21%に達し、やや多の発生となった。		
	ネギアザミウマ	並	並	3月以降やや増加したが、全般に平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
タマネギ (元年植付)	白色疫病		未確認	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった。		
	べと病		未確認	”		
冬ニンジン (63年播種)	黒葉枯病	やや早	並	9月以降各地に発生し、一部に多発は場がみられ、10月下旬に県平均発病株率は20%に達したが、発生程度は軽かった。		・ポリオキシン剤により黒葉枯病、うどんこ病との同時防除
	うどんこ病	並	多	10月中旬から各地で発生し、発生は場率60%、県平均発病株率80%と多発した。	・秋季の乾燥	
冬ニンジン (元年播種)	黒葉枯病	やや早	やや多	8月以降各地に発生し、一部に多発は場がみられ、10月に県平均発病株率は50%に達したが、発生程度は軽かった。	・9月の風雨	
	うどんこ病	並	やや多	10月中旬から各地で発生し、一部に多発は場がみられ、発生は場率は64%、県平均発病株率26%とやや多の発生であった。	・10～11月の乾燥	
冬レタス (63年植付)	灰色かび病	並	並	11月以降結球期に入ったレタスに発生がみられた。全般には平年並の発生であった。		・薬剤耐性菌の発生
	菌核病	並	並	平年並の発生であった。		
冬レタス (元年植付)	灰色かび病	やや早	並	10月から発生がみられ、全般に平年並の発生であった。		・薬剤耐性菌の発生
	菌核病	並	並	平年並の発生であった。		
イチゴ (63年植付)	灰色かび病	並	並	12月まで少発生で経過したが1月以降増加し、3月下旬に県平均発病果率2%まで漸増したが、4月はやや低下した。		・薬剤耐性菌対策として薬剤の輪播散布
	うどんこ病	並	やや多	育苗期から発生はやや多く、定植後はビニール被覆後にさらに増加した。11月以降、果実でも発生がみられ、県平均発病果率は	・10月、4月の乾燥	・主要栽培品種のうどんこ病り病性がやや

				4月下旬3%、5月上旬35%とやや多発した。		高い ・育苗期から本田初期における初期防除の徹底
	ハダニ類	並	やや多	育苗後期から定植期にかけてやや多発したが、その後の防除により減少した。3月下旬より再度増加した。	・育苗期の防除不徹底 ・冬季の温暖	・薬剤抵抗性ハダニの発生 ・ミツバチ導入時期の防除
	ハスモンヨトウ	並	やや多	育苗期からやや多発したが、ビニール被覆前の防除により発生は減少した。		・育苗床及び本圃周辺の防除の徹底
イチゴ (元年植付)	灰色かび病	並	並	12月下旬、県平均の発病果率は0.03%である。		・薬剤耐性菌の発生
	うどんこ病	並	並	育苗期の6月に発生は場率100%、県平均発病株率62%と多発した。その後、減少し定植後もみられなかったが、10月下旬以降発生し、11月下旬には県下の発生は場率は19%、発病株率は2%と増加した。果実での発生は12月下旬、発病果率1%である。	・10~11月の乾燥	・主要栽培品種のうどんこ病り病性がやや高い ・育苗期から本田初期における初期防除の徹底
	アブラムシ類	並	やや多	やや多の発生で多発は場もみられる。県平均の寄生株率は9月下旬4%、10月下旬10%、11月下旬12%と増加したが、12月下旬は4%と低下した。		・薬剤による防除効果が低下した地域がみられる。
	ハダニ類	並	並	各地に発生がみられるが、発生は平年並である。県平均の寄生株率は9月下旬4%、10月下旬0%、11月下旬0.4%、12月下旬9%と増加傾向にある。		・薬剤抵抗性ハダニの発生 ・ミツバチ導入時期の防除
	ハスモンヨトウ	並	並	10月上旬に県平均の寄生株率3%に達したが、その後減少した。全般には平年並の発生である。		・育苗床及び本圃周辺の防除の徹底

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ショウガ	モザイク病	並	並	一部に多発は場（発病株率9%）もみられたが、全般には平年並の発生であった。		<ul style="list-style-type: none"> ・無病種しょうがの使用 ・アブラムシ防除の徹底
	白星病	並	並	全般に平年並の発生であった。		<ul style="list-style-type: none"> ・初期防除の徹底
	紋枯病	並	並	8月以降発生が目立ったが、全般には平年並の発生であった。		
	根茎腐敗病	並	やや多	9月以降発生が増加し、多発は場も見られた。	<ul style="list-style-type: none"> ・9月の風雨により増加した 	<ul style="list-style-type: none"> ・発病後の防除が困難 ・無病種しょうがの使用 ・植え付け前における土壌消毒の徹底
	メイガ類	並	やや多	9～10月に発生が目立ち、多発は場も見られた。		<ul style="list-style-type: none"> ・食入前における防除